

薇省相親憶昔年 重教二度続前縁
多君念旧情弥切 欲別重留意悵然。

茅亭小築依苔径 山雨初来響石泉 万里征塵銅鼓外 一尊郷思鏡湖辺

【読み】

薇省（びしょう）相親しんで昔年を憶（おも）い、重ねて教（おし）えんとして二度（ふたたび）前縁（ぜんえん）を続（つ）ぐ。茅亭（ぼうてい）小（すこ）しく築（きず）く苔径（たいけい）に依（よ）り、山雨（さんう）初めて来りて石泉（せきせん）響く。万里の征塵（せいじん）銅鼓（どうこ）の外、一尊（いつそん）の郷思（きょうし）鏡湖（きょうこ）の辺（ほと）り。多（はなは）だ君（きみ）の旧（きゅう）を念（おも）う情（じょう）弥（い）いよ切（せつ）に、別れんと欲して重ねて留め意（こころ）悵然（ちようぜん）たり。

【意味】

薇省（役所）で親しくした昔のことを懐かしく思い出し、再びこうして縁が続いたのは嬉しいことです。苔蒸した小道沿いに建つ小さな茅葺きの亭（あずまや）は趣があり、山に雨が降り始めると、石の間を流れる泉が心地よい音を立てています。万里の旅路の埃は銅鼓の響きの外に広がり（遠く離れた異郷の地、旅の疲れが積もる中で銅鼓の音を聞きながら）、一杯の酒に郷里を思えば、心が鏡湖のほとりへと向かいます。あなたが旧友を大切に思う気持ちはますます深まり、別れが近づくたびお互い引き留め合い、名残惜しさに胸が詰まります。

*薇省…役所。官庁。 *教…「縁を教え導く」、つまり「縁を再び結ぶ」というニュアンスか？ *征塵…旅の埃（旅の疲れや埃まみれの状況か？）

*悵然…心に物足りなさや寂しさが残るさま

【出典】再過郎岱恭朗軒司馬招飲夢魚亭即席率賦（沈世煒（しんせいゐ）・清）

再び郎岱（ろうたい）に過ぎり恭朗軒司馬の夢魚亭に招飲され、即席に率（そつ）として賦す

※詩題から、詩人が旅の途中で郎岱という場所を訪れ、旧友である恭朗軒司馬に招かれて、彼の亭で開かれた宴席に出席したことがわかります。そして、その席上で詩を即興で詠んだことを記しており、詩題そのものが詩の背景や状況を物語っています。